振り付けの「極意」

文＝石原 久佳

本誌及びDANSTREETサイトの編集長。音楽雑誌やダンス雑誌の経験を元に、音楽的な視点・教育的視点でのダンスの可能性を探る。著書に『ダンス部ハンドブック基礎編』。

振りは「付ける」もの？「付けられる」もの？

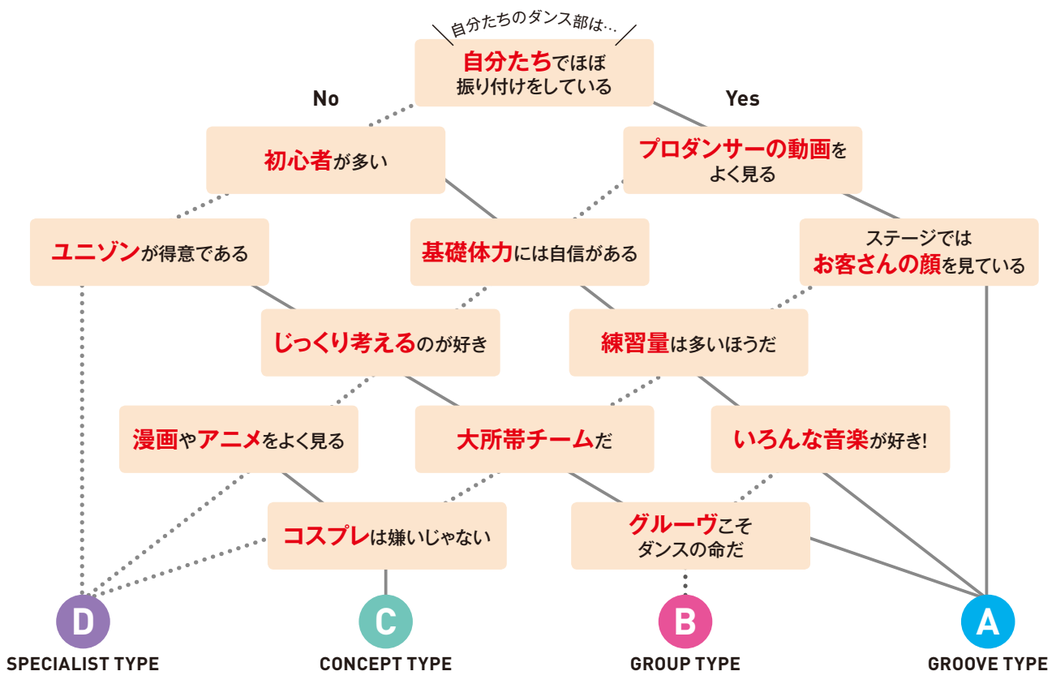
夏休みからダンス部のハイシーズン突入である。全国各地のダンス部の強化合宿や大会参加の準備では、さまざまな振り付けが数多く生み出されていくことだろう。ダンス部にさまざまな個性と違いがあれば、振り付けもさまざま。一つとして同じ振り付けがないところがダンスの面白さだ。また、その作り方も、部員全員で行なうもの、振り付けリーダーが中心になるやり方、外部からプロの振り付け師が請け負う方法、または自分たちで考えプロに手直ししてもらうシステムなどさまざま。振り付けを誰がするかとその結果の因果関係については議論されることもあるが、そこは学校や顧問のスタンスであり、部員にとっては入った部活の環境や伝統に従わざるを得ないところだろう。

教育的な意義で言えば、振り付けをしてもらう＝良い作品から学ぶ／自分たちで振り付ける＝作品を創る、と言うことができるだろう。音楽で言うならば、前者はスタンダードやクラシックを演奏する、後者はオリジナル曲を作曲するということで、両方ともに教育的には非常に意義が高い。この「真似る」「学ぶ」「考える」「創る」ということは、教育においてもスポーツにおいても重要な過程であり、ダンスでは「振り付け」という実践を通じて学ぶことができるのだ。今回はこの「振り付け」について、自分たちの適正や、その基本的な手順、チェックポイント、プロからのアドバイスなどの面で考えていこう。その中で、自分たちなりの「極意」が見いだせれば何よりだ。

自分たちに合ったスタイルはどれ？

理想の振り付けタイプフローチャート

まずは、自分たちに合ったスタイルを探すのが先決。気楽にフローチャートに挑戦してみてね！



各タイプの特徴と重要ポイント

GROOVE TYPE

HIPHOPやLOCKでシンプルにグルーヴ追求

実際、ダンス部では一番比率が高いだろうこのタイプ。初心者も含めた集団としては、決まった形の多いヒップホップやロックダンスの動きは一番合わせやすいし、ノリの良い音楽は観客からの共感も受ける。振り付けとしても、特別な技術や独自性や凝った動きが必要とされることは少ないので、ある意味で安心して取り組めるスタイルだろう。ただし、人口が多いだけに、その差がどこで出てくるかをしっかり考えないと、「よくあるダンス」で片づけられてしまう。リズムダンスの代表格とも言われるこのスタイルでの肝は「ノリ」「グルーヴ」。P.15の記事にも詳しいが、それをマスターするには、豊富な練習量と、強靭な体幹力、音楽への理解を深めていきたい。

▶関西の学校には、ロックダンスの強豪チームが多い。

▲ニュージャックや音ハメ、ミドル、ガールズなどヒップホップにもさまざまなスタイルがある。

GROUP TYPE

これぞ伝統の部活ダンスの群舞スタイル

現在はリズムダンスで盛り上るダンス部だが、創作ダンスとしての歴史のほうがはるかに長い。創部の古いダンス部には、そういった創作ダンスの伝統を継ぎながら、現代風にアレンジした印象的な作品を作るところもある。スタイルやグルーヴを追求するのは時間がかかるが、創作ダンスでは良い振り付けとチームの統率力があれば、作品としての完成度をある程度まであげることができる。ただ、「創作」というだけあって、その独自性やテーマ性などは厳しく問われるところであり、その上でジャズなどの基本スキルが備わっていれば格段に表現力をあげることができる。リズムに頼れないだけに、何をもって観客を引き込むかを突き詰めたい。

◀世界観を作るための衣装作りや選曲にも相当な気が配られている。

▲リズムダンス主体の大会での創作ダンスチームのパフォーマンスは、息を飲むほどのインパクトを与えることがある。

CONCEPT TYPE

コンセプト一発！ストーリーと世界観で勝負

コミカルな衣装や音楽、ドタバタのストーリー展開など、こちらも学生らしいノリがある楽しいスタイル。アイディアは閃きで、一言で説明できるシンプルさがあることに尽きる。作品作りにおいては、あまり詰め込みすぎないこと。アイディアに溢れて要素を詰め込みすぎてしまうと、焦点が絞れず消化不良になってしまうので、当初の一発アイディア（もしくは一番やりたい場面）にピークを持って来られるように起承転結を構成したい。昨年のダンス部全国大会では、高度なスキルのうえにパロディのアイディアがハマったエンターテインメント作品が多く見られた。賛否両論はあるだろうが、ダンスの大衆化にパロディは強いのだ。

▲「ダンス部あるある」とも言えるSF的な展開。アイディアの被りにも気をつけたい。

▶数々の大会で喝采を浴びた登美丘高校ダンスの80年代パロディ作品。

SPECIALIST TYPE

POP・BREAK・JAZZなどの専門ジャンルで攻める

習得には長い年月と地道な影練習が必要だが、もともと日本人ダンサーが得意にしている理由には、決まった「型」を磨き上げるという気質的な相性の良さがあるのだろう。これらに加え、アニメーションというロボットのような不思議な動きを群舞で表現することができれば、一気に作品の世界観が広がる。このスタイルを取るダンス部には、もともと習得している部員がいる、あるいは突き詰めたい男子部員がいる、前述のCタイプを表現するために必要、などの場合が多いだろう。振り付けの構成としても、ソロダンスに抜群のアクセントをつけることができる。専門分野なので、技術を磨くために外部のスタジオに通うのもひとつの手だろう。

▲最近目立つようになってきた男子ダンス部員（あるいは男子校）のブレイクチーム。

▲日本ダンス大会で準優勝した北九州市立高校の、アニメーションを群舞に活かした個性的な作品。